**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第１４回　（２０１５年３月３日）**

**・第１４回の勉強範囲：「第二版の出版のことばと序文」(11)頁**

・📖 p(10)　**シュリー・ラーマクリシュナのメッセージの特徴**

・📖（p(11)つづきを読む）それは個々人に即したものでありながら、同時に普遍的で、調和に満ち、**簡潔にして深淵な**メッセージである。

（解説）

前々回（１２回）から引き続き、シュリー・ラーマクリシュナの、**シンプルで深い教え**について、説明をしています。

また、前回、それらを読むときの注意点もお話しました。『ラーマクリシュナの福音』には例や物語がたくさんあるが、それらの説明がないときもあるので、**前後関係をよく考えて読まなければならない**ということ。

前回の最後で話した、**子供のような信仰**の例をもうひとつあげましょう。**傘を持って行った子供の話**。

ある田舎でのこと。日照り続きで雨が降らず、お米がとれずに、皆とても困っていました。そこで、みんなで教会に行って、神さまに祈ろう、そうすれば雨が降るかもしれない、という話になりました。その日、ある子どもが、雲ひとつない晴れた日なのに、傘を持って歩いていました。皆さんは変に思ってたずねました、「どうして傘をもっているんだい？」その子は答えました、「だって、神様に祈ったら、すぐに雨が降るんでしょう？　それなら帰るときに傘が必要になるでしょう？」

ふつうのひとは、雨は降るかもしれないし、降らないかもしれない。子どもの信仰は、１００％、降ります！　おもしろいでしょう？　子供の信仰は、それです。でも、成長するにつれ、その信仰がうすれ、混乱と疑いがたくさん出てきます。信じない、信じない、と疑いの心になります。

これは私の経験です。私が子どもに飴をあげると、その子はすぐに喜びます。大人に飴をあげると、その人ははじめ疑います。また、スワーミージーもこのように表現しています。もし家に泥棒が入っても、子どもはその人が泥棒かどうか、わからない。なぜなら子どもには「泥棒」というアイデアがないから。

子供のような信仰。神様を悟るためには、このような信仰が大事です。その信仰がないと、すすめません。聖書にも、使徒トマスが疑り深い人物（ダウティング・トマス Doubting Thomas）として登場します。それがあると、霊的な生活が進みません。シュリー・ラーマクリシュナが話した**子供のような信仰は、疑いについての教えでもあります**。

それから、『福音』の中には、**鳥を使った例**がたくさんありますね。

＜**ホマ鳥の例**＞

ホマ鳥はとても高い空中で卵を産みます。ヒナは、落ちる途中で卵からかえり、かえったら一目散に上空の母鳥のもとに帰ります。この例の意味も深いです。前生からとても純粋な人は、今生に生まれても世俗的に戻ることはない、ということです。その人の帰るところは「純粋」、つまり、神様のところです。その人は世俗的なところには戻れない。前生から悟っているみたいですから。（☞『福音』p15、136、572）

＜**マストにとまった鳥の例**＞

一羽の鳥がうっかり舟のマストにとまってしまった。鳥が気付いたときには、どちらを見ても陸地は見えなかった。鳥はいろいろ考えた。家族のこと、将来のこと。陸に戻らなければならないと思った。東に飛んでいってさがしたが、陸は見つからなかった。西にいっても見つからなかった。南、北、見つからなかった。疲れて戻ってきて、最後、平安をもって、マストの上に静かに座りました。

我々も、最初は、神様を見たい、神様を悟りたいと一生懸命実践します。一生懸命実践して、しかし私一人の力では出来ないですから、神様にお任せします。あちこちに行かないで、神様にお任せします。これはその例です。もちろん最初の努力が必要です。最初に努力しないといけません。「人事を尽くして天命を待つ」それです。（☞『福音』p852、410）

＜**卵をあたためている鳥の目の例**＞

タクール（シュリー・ラーマクリシュナ）はあるとき言いましたね、「私は卵をあたためている鳥の絵が欲しい。あなた、持っていますか？」。

鳥が座って、卵をあたためている。その状態のときの鳥の目。目は開いていますが、何も見ていません。すべてを集中して、卵をあたためています。目を開けているけど何も見てない。このケース、ときどき我々にも起こりませんか？　鳥は何を考えていますか？　自分の赤ちゃんが生まれてくること。そこに自分のすべての感情、すべての気持ちを集中しています。

ヨーギも同じ状態。目は開けていますが、何も見ていない。心で神様のことを集中して考えているからです。歩くときも目を開けているが、何も見ていない。心で神様のことを集中して考えています。我々にも出来ます。集中してジャパをすると出来ます。

世俗的なことでもありますね、何かを集中して考えると、周りのことが眼に入らない、耳に聞こえないということが。集中すると何も見ていない、聞こえていない、という結果は同じだが、シュリー・ラーマクリシュナが言うことは、対象は世俗的なことではない、神様です、ということです。

タクールはその絵が欲しいと言いました。Ｍさんはその絵をつくってタクールにあげました。Ｍさんが最初につくったベンガル語の『福音』に、その写真が掲載されています。（マハーラージ、その本を持ってきて、絵の写真を見せる）目を開けても何も見えてない。心の中にずっと神様がいますから。

＜**オウムの例**＞

オウムはまねが得意。ペットなので、神様を尊敬する飼い主なら、オウムに自分が好きな神様の名前を教えるでしょう。これはインドでふつうです。たとえば、「ハレークリシュナ、ハレークリシュナ」。私はあるとき、ベルル・マトで、ほんとに人の声のようなオウムを聞いたことがあります。「ラーマクリシュナ、ラーマクリシュナ」ほんとに完璧でした。

福音の教えは、オウムは、物まねは得意だが、それは言葉だけ。声だけ。オウムが神様がどなたなのか、知ることはない。猫に攻撃されて危ないときも、オウムは決して神様の名前は唱えない。ギャオギャオと鳴くだけです。なぜなら中に入ってない。真似しただけですから。真似しただけでは助けになりません。中に入らないと、困った時、誘惑があるとき、助けになりません。本当に、心の中に、入らないと、いくら、神様の名前を繰り返しても、何の助けにもなりません。浅い信仰と深い信仰。皆さん、神さまを信じていますが、その信仰は浅いのではないですか？　オウムの信仰みたいではないですか？

ヴェ－ダーンタも同じです。「私は魂である」と、深く、安定して信じていますと、死の恐怖は絶対出ません。深く、安定して信じていなければ、死の恐怖はあらわれます。それが証明です。

最後に、**ヘビとブラフマチャーリの例**。（☞『福音』p12）

これは信者にとって、とても大事なたとえ話です。

ギャーナ・ヨーガもバクティ・ヨーガも、「すべては神様です。神様は偏在です。すべてはクリシュナです。すべてはラーマクリシュナです」と言います。だったら、世の中に悪い人はいるのか？　いるとしたらどうしたらいいのか？

助言は、悪い人の中に神様はいるが、しかしそこに神様はいても、悪い人は「避けたほうがいい」。これは矛盾ではありません。助言は、**「その中に神様はいますが」避けてください**。１００％できなくても、できるだけ避けてください。ときどき話さなければならないなら話します。だけどそれだけ。それ以上近づかない。なぜなら、そうしないと、信者に憎しみがあらわれる可能性があるのです。悪い人に憎しみを持つ。それが、絶対に、だめなことです。そのために、信者のために、悪い人に神様はいるが「避けてください」。これは聖者のためには必要ない。彼らは悪い人でもＯＫです。しかし我々は、そのレベルまで上がってない。だから、気を付けねばならない。ときどき、悪い人を直したい、という思いに駆られる人がいます。しかし、それも気を付けてください。なぜなら、悪い人を直すとき、自分も悪くなる可能性があるからです。よっぽど純粋になっていないと、悪い人の影響で、自分も悪くなる可能性がある。社会でもそのような例はいろいろあります。たとえばボランティア。目的はいいのですが、自分のレベルが上がってないと、自分が困ることになったりする。自分のレベルが上がっていないのであれば、祈ったほうがいいです。その場合、避けるだけではなく、その人のために祈ったほうが、より良いです。自分は行かず、神様に祈る。神様に頼む。

『福音』の中の、シンプル、だけどとても深い、面白い例、わかりやすい例。これらを使って、『福音』を読んだことのない人たちのためにも、お話してください。それはとても良いことではありませんか？　シンプルだけど深い。

次回は、次の項目に入ります。

『バガヴァッド・ギーター』も使います。

（『福音』勉強会第１４回、以上）